平成三十年度

中学校入学試験問題　国語

第二回（二月二日実施）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項（じこう）をよく読んでおきなさい。

一、問題は二十九ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。

二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。

三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。

四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一

次の文章を読んで、後の1～13の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがある。）

家に帰ると、母に「真琴の勉強みてあげてよ」と言われた。

「……また？」

「お兄ちゃんなんだから」

母は台所で野菜を切りながら言った。

「二階？」

と僕は聞いた。

「うん、下でやってるとすぐに、できない～って話しかけてきて進まないの。お母さん、ご飯作ってるあいだラジオ聴きたいし、下だとあの子、集中できないのよ」

僕は階段を上がり、真琴の部屋に行った。ドアを開けると、

「お兄ちゃん、これわかんない～」

と真琴が情けない声で言った。

「算数？」

①ドアを半分くらい開けた状態で部屋の入り口に立ったまま、真琴にたずねた。真琴は算数が苦手なのだ。小四にもなって、いまだに九九を間違える。

「そんなところに立ってないで教えてよ」

「うん」

と言いつつ部屋に入るのを僕は躊躇する。

「なにしてるの、お兄ちゃん。これがわかんないんだって～」

真琴がイスから立ち上がり、僕の腕をつかんで勉強机の隣まで引っ張っていく。ノートと教科書が広げられている。シャーペンではなくHBの鉛筆と、おろしたての消しゴム。勉強机の隣にはベッドがあり、北側の壁に本棚がある。余計なものはなく、よく整頓された部屋だ。僕の部屋も真琴とだいたい同じ。特別な趣味もない子供の部屋は、だいたいこんなものだろう。

「どれがわかんないんだよ」

「これ、ちんぷんかんぷん」

しかし真琴はちょっとヒントを与えるとすぐに理解した。少し我慢して自分の頭で粘ってみればできるのに、最初から僕に手伝ってもらおうと②□を抜いているに違いない。③兄がいるという利点を最大限に生かすという賢さを僕の妹は持っているのだ。

「次のもいまのと同じやり方でできる」

六畳の部屋で真琴がノートに計算式をカリカリと書くのを見ながら、だんだん、心拍数が上がって、何かにA されるような息苦しさを僕は感じ始める。その何かは僕の背後の、本棚の上にある。僕の部屋にはないが、真琴の部屋にだけあるそれらが僕に与えるA 感で、僕は、真琴の部屋にいることが、だんだんと耐えられなくなってくる。

「真琴、ちょっと、下でやろう」

と言って僕は部屋を出た。

出るときに、目に入ってしまった。本棚の上に飾られた、トロフィーや盾やメダルと、その上の壁に貼られた何枚もの賞状。とくに、

メダルの数は多い。金色や銀色や銅色のもの。一枚なくなってもすぐには気がつかないくらいにたくさんある。そしてそれらは、いつもギラギラと光っている。水泳を一年でやめた僕を［B］みたいに。

逃げるようにして下に下りていくと、

「もう終わったの？」

と母に言われた。

④「いや、下でやろうかと思って」

⑤「真琴の部屋でやりなさいよ、せっかく勉強机あるんだから」

「ちょっと真琴が気分転換したいって言うからさ」

真琴が僕に続いて下りてきた。勉強道具をa イッシキ抱えている。

母が不満そうにラジオのスイッチを切った。

僕は、鍋で何かが煮込まれる音を聞きながら真琴の宿題を手伝った。

僕が水泳を始めたのは小一のときだった。

父は僕が幼稚園の年中になったあたりから僕に水泳を習わせたくてうずうずしていた。父は若いころ国体で泳いだ水泳選手だったらしいので、その夢を息子にも引き継いでほしかったのだろう。息子が生まれたら自分がやっていたのと同じスポーツをやらせたいと考えている男は一定数いるようだけど、父はまさにそれだった。

でも母は、そんなに小さいうちから習い事をさせるのには反対と言って、二年ほど、僕を水泳教室に通わせるのを遅らせた。せめて

小学校に上がってからにして、と。

（中略）

小学生になりさえすれば母のキョカ[b]がおりてスイミングスクールにも通えるし、二十五メートルプールも解禁されるので、僕だって練習をして、すぐに父みたいに、ロケットみたいなクロールができるようになるのだ。それまで我慢すればいいだけだ。

そして幼稚園を卒業し、小学生になり、念願叶って僕はスイミングスクールに通い出した。

父は張り切って、⑥子供にはもったいないくらいの高価なゴーグルと水泳パンツを僕に買った。

初めてスイミングスクールに行った日、コーチが教えてくれたのはバタ足だった。僕は、二年間も市民プールで父からバタ足を習っていたので、とても上手にバタ足をすることができた。僕と同じで小一になるのと同時に入会した子が三人いたが、その子たちは、幼稚園以外でプールに入ったことはないと言った。その日、一度だけ、よーいドンでいっせいに前に進んでみたら、僕が一番速かった。コーチも、正太郎君、速いわね、と言ってくれた。きっとぼくがいちばん水泳がうまいぞ、とそのときの僕は思った。

家に帰ると、母に聞かれた。

「正太郎、どうだった？」

「すごくたのしかったよ！」

僕は、初めて子供用丸プール以外のプールに入ったという感動で興奮していて、その夜はテレビを見るときも、ご飯を食べるときも、お風呂に入るときもゴーグルをつけて、母を笑わせた。お父さんの子供ね、と母は何度も言って楽しそうだった。

でも、一か月くらいたって、僕はあることに気がついた。

僕のバタ足は、同学年の四人の中で、一番遅くなっていたのだ。

僕の⑦二年間の貯金は、たったの一か月でほかの子たちに追い越されてしまった。

二か月がたち、バタ足をしているのは僕だけになった。ほかの子たちは、クロールの練習を始めていた。

僕にとって、泳ぐことは、思っていた何倍もむずかしかった。

いくら足を動かしても、思うように体が前に進まないのだ。

頭の中では父がやっていたみたいに、爆発のような大きな水しぶきを上げて、ぐんぐん前に進んでいるつもりでも、実際は、ちんたらと、よく見なければ前進しているのがわからないくらいのスピードでしか進まない。どうして、僕以外の子たちは、ちゃんと前に進むのだろう。

でも、父はそんな僕に、根気強く、コツさえつかめばおまえも絶対に速くなるはずだ、と言い聞かせ、週末にはやはり僕を市民プールに連れていった。二十五メートルプールで、バタ足の特訓をしてくれた。あんなに憧れた二十五メートルプールは、僕にとって苦痛でしかなかった。水泳を始めてから僕は一度も上達を感じたことがなかったから。

簡単な話で、僕は、水泳に向いていなかったのだ。

スクールに通い始めて一年がたったころには、コーチはお情けで僕にもクロールを教えてくれていたが、僕のクロールが、まるで、泳げない人が沈まないようにあがいているみたいな、c無様な泳ぎでしかないことが、僕にはわかった。順調に技術を上げていく僕以外の三人は、へたくそな僕の泳ぎを見て笑った。

ある日僕は、水泳をやめたいと父に言った。

「ほんとにやめたいのか?」

父は、食卓に僕と向かい合って座り、真剣な目で僕を見て言った。大人の、本当に真剣な目を見たのはそのときが初めてだった。

「一度やめたら、もうやり直すことはできないぞ」

⑧父の目にはぎりぎりとした力がこもっていて、僕は、その目を、怖いと思った。

「それでもほんとにやめるのか？」

僕は、水泳が嫌いなのだ。泳ぎたくないのだ。笑われたくないのだ。絶対に、やり直したくなんかならない。

「正太郎、やめたかったら、父さんの目を見て言いなさい」

いやだよ、お父さんの目を見てなんて、すごく、言いづらいじゃないか。

でも、僕は、水泳を続けることのほうが耐えられなかった。

僕は父の目を見て言った。

「水泳、やめたい」

父の目から、ふっと、力が抜けた。

それ以来、父は、僕に興味を失ったように見えた。

二週間後、当時年中だった真琴を父はスイミングスクールに入れた。母の反対を押し切って。真琴は、泳ぎを教えられるとスポンジのように吸収し、まさに⑨水を得た□のように水中で躍動した。彼女が泳いでいるところを見たことはなかったが、家の中で交わされる会話を聞いていると、それがわかってしまう。⑩父のうれしそうな声が、僕には痛かった。

真琴は、僕のために父が買ったのと色違いのゴーグルをつけて、ぐんぐん上達した。

僕は、真琴が水泳を始める前にやめておいてよかったと思った。三つも年下の妹が上達して、すぐに僕を追い抜くところをすぐ近くで見せられるのは、きっと、僕には耐えられなかっただろう。

水泳をやめてから、僕が父に話しかけることはなかったし、父のほうも、僕に話しかけることはほとんどなかった。

（小嶋陽太郎『ぼくのとなりにきみ』による）

問1　――線①「ドアを半分くらい開けた状態で部屋の入口に立ったまま」とあるが、「僕」が部屋に入らなかったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　部屋に入ると自分の過去の嫌な経験を思い出すから。
ロ　妹に自分で考えて勉強するくせをつけさせたいから。
ハ　部屋に入って妹の苦手な算数を教えるのは面倒だから。
ニ　自分だけが妹の世話をするのは不公平だと思ったから。

問2　――線②「□を抜いている」が「仕事や作業をいいかげんに行う」という意味の慣用句になるように、□に入る漢字一字を考えて答えなさい。

問3　――線③「兄がいるという利点を最大限に生かす」とはどのようなことか。それを説明した次の文の【　　】に当てはまるように十字以内で考えて答えなさい。

・　兄に【　　】こと。

問4　文章中に二か所ある［A］に共通して当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　束縛（そくばく）　　ロ　失望　　ハ　嫌悪（けんお）　　ニ　圧迫（あっぱく）

問5　［B］に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　恨（うら）む　　ロ　刺（さ）す　　ハ　慰（なぐさ）める　　ニ　無視する

問6　――線④「いや、下でやろうかと思って」と言った時の「僕」の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　妹の勉強に最も適した環境（かんきょう）を与えてやろう。

ロ　場所を変える理由はあいまいにしておきたい。

ハ　我慢の嫌いな妹の気分を変えてやる方がよい。

ニ　本当は勉強を教えたくないことを察してほしい。

問7　――線⑤「真琴の部屋でやりなさいよ」と「母」が言ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　真琴のわがままを許してはいけないと思ったから。
ロ　勉強机がある方が真琴は集中できると思ったから。
ハ　自分のやりたいことをできなくなるのが不服だったから。
ニ　兄妹で話しかけてこられると夕飯の支度ができないから。

問8　――線⑥「子供にはもったいないくらいの高価なゴーグルと水泳パンツを僕に買った」とあるが、その時の「父」の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　自分の息子にもとことん水泳を頑張ってほしいと期待をかけている。
ロ　スクールに通う他の子供と自分の息子との差を見せようとしている。
ハ　少しでも高くて良いものを与えるのが親としての義務と思っている。
ニ　息子が軽い気持ちでスクールをやめないようにしたいと思っている。

問9　――線⑦「二年間の貯金」とあるが、どのようなことを「貯金」に例えているのか。十五字以上二十字以内で答えなさい。

問10　――線⑧「父の目にはぎりぎりとした力がこもっていて」とあるが、その時の「父」の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　これまで息子と常に二人三脚（ににんさんきゃく）で水泳を続けてきたのに、思うように上達しないわが子を見て真剣に怒（いか）りを感じている。

ロ　自分がやっていた水泳を息子にもやらせたいという念願がかなったのに、ここでやめさせたくないと強く思っている。

ハ　水泳への自分の思いが息子に伝わらないので、声高（こわだか）に怒（おこ）るのではなくあえて怒りをおさえて説得しようと考えている。

ニ　水泳をやめたいという思いもかけない息子の言葉を聞いて驚（おどろ）くとともに、わが子の本心がわからずにとまどっている。

問11　――線⑨「水を得た□のように」の□に入る漢字一字を考えて答えなさい。

問12　――線⑩「父のうれしそうな声が、僕には痛かった」とあるが、「僕」がそう感じた理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　自分は妹と違って、父を水泳で喜ばせることができずにつらかったから。

ロ　水泳にしか興味を示せない父が、子供の目から見てもあわれに感じたから。

ハ　本当は水泳を続けたかったけれど、やめてしまったことを後悔（こうかい）しているから。

ニ　水泳をやめた自分を父がばかにしていると思い知らされて、苦しかったから。

ホ　息子に関心を失った父が、楽しそうにしているのを見るとしゃくにさわるから。

問13　＝＝線a「イッシキ」b「キョカ」を漢字に直し、c「無様」の読みをひらがなで答えなさい。

（問題は次のページに続く）

二

次の文章を読んで、後の1～6の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがある。本文を横書きから縦書きにしたため、表記を変更した部分がある。）

推論は、言語の理解にも深いつながりがあります。私たちは毎日、多くの文を聞いたり読んだりし、それらが語る内容が真実かどうかに思いをはせていますが、それらの文が他の文とまったく無関係に「本当」だったり、「間違い」だったりすることはほとんどありません。ある文が「本当」だったら、別のある文も「本当」だということになったり、また別のある文は「間違い」だということになったりします。

①単純な例を一つ挙げてみます。②「花子は犬を飼っている」という文が本当だった場合、私たちは推論によって、「花子が飼っているような動物が存在する」という文が本当だということが分かり、さらにそれを言い換えた「花子は動物を飼っている」という文も本当だということが分かります。また同時に、「花子は犬を飼っていない」という文が「間違い」だということも分かります。「花子は犬を飼っている」という文から真偽を導ける文は、これら以外にもたくさんあります。

■「花子は犬を飼っている」が本当である場合

A 本当であることが分かる文

「花子は動物を飼っている」

「動物を飼っている人がいる」……

B 間違いであることが分かる文

「花子は犬を飼ってはいない」

「花子は動物を飼ってはいない」……

また、当たり前のことですが、「花子は犬を飼っている」という文が本当でも、そこから真偽が導けない文はたくさんあります。

C 本当かどうか分からない文（影響を受けない文）

「花子はチワワを飼っている」

「花子は広い家に住んでいる」……

右の中にはもちろん、「本当である確率が高そう（あるいは低そう）」なことも含まれています。しかし、「絶対に本当」「絶対に間違い」と言い切れるものはありません。

（中略）

ここまで述べてきたように、推論は、私たち人間が考えたり話したりするときに普通に使っているものです。しかし、もし推論がそのように普通に使えるものであるなら、なぜ世の中にはわざわざ「論理的な考え方」や「話し方」を勉強しなければならない、という風潮があるのでしょうか。世間一般に言われる「論理」は、とても高度なものであるように聞こえますし、「私は論理的な考え方が苦

手」と思っている人も少なくないと思います。しかし多くの場合、それは論理そのものが難しいものだからというより、他のさまざまな要因によるものであるように見受けられます。

そういった要因の一つには、「感情」や「都合」があるでしょう。私たちが生きていく上では、感情的に認めたくないこと、また認めてしまうと都合が悪いことが多々あります。そういう「受け入れがたい結論」が出てしまう場合、私たちは意識的、あるいは無意識的に論理をゆがめようとしてしまいます。また、誰かの中で「どうしてもこういう結論にしたい」というふうに決まっている場合も、論理は力を発揮することができません。会議などの場で、最初から結論が決まっているせいで③真っ当な意見が通らない、という経験をした人は少なくないと思います。個人的なおしゃべりでも、「たとえ事実と違っても、私がこう思うんだから絶対こうなんだ」という姿勢を崩さない人には、何を言っても通じません。

二つ目の要因としては、「単なる間違い」が挙げられます。「推論パターン」の一つひとつは単純でも、それらがいくつも重なれば追うのが難しくなってきますし、見落としも多くなります。とくに、「Aの場合はこうだが、Bの場合はこう」のように「場合分け」が必要なときは、「後で戻ってくるべき地点」が増えてきて④難しくなります。こうなると、記憶力や慣れが必要になります。

また、本当は正しい推論パターンではないのに、そのように見えてしまう「パターン」がいくつかあり、それらはたびたび間違いを引き起こします。たとえば次のパターンは、正しい推論のパターンではありません。

◆間違った推論のパターン

【前提】 AはすべてB。xはAではない。

【結論】 xはBではない。

例：

【前提】　A　65歳以上の人はすべて　B　1000円で映画が見られる。

　　x　太郎は　A　65歳以上ではない。

【結論】　x　太郎は　B　1000円で映画が見られない。

右の推論の例が正しくないことを見破るのは、それほど難しくないと思います。たとえ前提が正しいとしても、「高齢者割引以外の割引サービスがあって、太郎はそれを利用できる」という可能性が必ずしも排除されないからです。しかし、場合によっては、こういった「推論の間違い」を見破るのが難しくなることがあります。たとえば、つらいことが続いて精神的にひどく参っているときに、誰かから「この壺を買った人はみな幸せになれる。あなたはこの壺を買っていない。だから、⑤あなたは幸せになれないのだ」などと言われたらどうでしょう。ついつい買う気になってしまうかもしれません。

三つ目の要因として、「言葉がきちんと定義されていない」ということがあります。「定義」ということそのものを定義するのは簡単ではありませんが、ここでは、「Aという言葉を定義できる」ということは、「どんなものについても、それがAであるかどうかを判定できる」ということだとします。これができていないと、自分と相手が同じ言葉を違う意味で使ってしまい、⑥話が噛み合わなくなることがあります。

たとえば二人の人が高齢化社会について議論をしていて、一人は「高齢者」という言葉を「65歳以上の人」という意味で使っているのに、もう一人が「75歳以上の人」という意味で使っている場合、68歳の人について導かれる結論は、たとえ論理的なものであっても合意が得られないはずです。この場合、もしどちらかが「何かおかしいな」と思って、相手に「どういう意味で『高齢者』って言っていますか?」と確認(かくにん)すれば済むかもしれません。

(川添愛(かわぞえあい)『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット』による)

問1　――線①「単純な例」はどのようなことを伝えるための例か。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　同じ文章の中にあったとしても、文と文とは互(たが)いに無関係であること。

ロ　互いに無関係な文であっても、推論を用いて真偽を確かめられること。

ハ　ある文の真偽がわかれば、関係のある別の文の真偽が推論できること。

ニ　文を「本当」と「間違い」に分けることで、言語の理解が導けること。

問2　――線②のように「『花子は犬を飼っている』という文が本当だった場合」、次の1～5の文は、――線A「本当であることが分かる文」、B「間違いであることが分かる文」、C「本当かどうか分からない文」のどれに当たるか。それぞれA～Cの記号で答えなさい。

1　「花子は犬が好きである」
2　「花子は猫(ねこ)が好きである」
3　「犬を飼っている人がいる」
4　「花子は犬しか飼っていない」
5　「犬を飼っている人は一人もいない」

問3　――線③「真っ当な」のここでの意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　正直で真面目(まじめ)な　　ロ　懸命(けんめい)に考えぬいた
ハ　論理的に考えて正しい　　ニ　世間一般に認められた

問4　――線④「難しくなります」とあるが、なぜ難しくなるのか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　「場合分け」をした推論を一つひとつ確認しなければならないから。

ロ　「単なる間違い」を一つひとつ正していくと推論が追いつかないから。

ハ　「後で戻ってくるべき地点」では推論を間違えやすくなってしまうから。

ニ　「推論パターン」が多くなるとどれも正しいパターンに見えてしまうから。

問5　――線⑤「あなたは幸せになれないのだ」という結論はなぜ正しくないのか。その理由を説明した次の文の【　　】に当てはまる表現を、十五字以内で考えて答えなさい。

・　たとえこの推論の前提が正しいとしても、【　　】という可能性があるから。

問6　――線⑥「話が噛み合わなくなることがあります」とあるが、例えば、「早寝（はやね）する人のほうが寿命（じゅみょう）が長い」という話題について議論をするときに、話が噛み合うようにするために必要なのはどのようなことか。「～ということ。」に続くように十五字以内で考えて答えなさい。

（問題は次のページに続く）

二

次の文章を読んで、後の1～14の問いに答えなさい。（問題の都合上、本文を変えているところがある。＊のついた説明は出題者が加えたものである。）

男子厨房に入らず。

男子たる者、女の居場所である台所などうろつくものではないという戒めである。しかし、男が専ら外で働いて稼ぎ、女は主婦として専ら家事を担うという役割分担は、今やほころびだらけになっている。時代は変わったのだ。男子といえども、①さまざまな事情で厨房に入らなければならなくなった。

これは核家族が当たり前になったことをも関係しているだろう。大家族であれば世代をまたがって女性同士が家事を助け合えた。しかし、核家族になると、子どもが家を出たあとに残されるのは老夫婦だけ。もしも妻が先に寝たきりにでもなれば、夫が飯を作らなければ生きていけない。人口減少を背景に女性も社会で活躍することが促される時代である。夫婦共働きになれば料理は妻の仕事だなどと一方的に押しつけることはできない。そして私のように単身赴任となれば自分が食うために②否応なしに台所に立たざるを得ない。事情はさまざまであっても、男子が厨房に入ることはごく普通の日常になったのだ。

ところが、男性による台所俳句はまだまだ成果が乏しいように思う。虚子（＊俳人の高浜虚子）が「ホトトギス」（＊俳句雑誌）に設けた「台所雑詠」は「投句者婦人に限る」と断りがついていた。これは［A］投句することを禁じる趣旨だった。そもそも男性が台所で俳句を作るということが想像しにくい時代だったのである。そうした意識が今も底流にあって男の台所俳句が増えないのだろう。しかし、今や私にとっても台所は重要な生活の場である。それが俳句の題材になって悪いはずはない。そうでなければ、今の私の存在の一部が欠けてしまう気がするのだ。

③オムレツが上手に焼けて落葉かな　　時彦

男子厨房に入らずの戒めをいち早く破って台所に創作の題材を求めた俳人が草間時彦（大正九年～平成十五年）である。時彦はサラリーマンだったが、共働きでもなく、単身赴任をしたわけでもなく、妻を介護するといった事情があったわけでもない。ただ、食いしん坊だったためついつい台所に入ってしまったらしい。私が男の台所俳句の先輩として私淑する（＊ひそかに尊敬する）のは、この時彦である。

さて、この句、オムレツが上手に焼けたとはさすが台所俳句の先輩である。私は素材の風味を生かしたシンプルな調理が好きだ。卵とバターと塩胡椒少々だけで勝負が決まるオムレツなどその典型と言えるのだが、これが簡単ではない。ホテルの朝食会場でコックがオムレツを焼いてくれるのを見ていると、フライパンを傾けて柄をとんとん叩くだけで卵がいともたやすくきれいな紡錘形になり、しかも薄皮一枚に包まれた中身は半熟という焼き上がりになっている。私は残念ながら今もってそんな美しいプレーンオムレツを作ることができない。

「オムレツのコツは、一つは使いこんだフライパンを使うこと。二つは上等で新鮮なバターをたっぷり」

時彦は「さるシェフの言葉」をこう紹介している。時彦が推奨するバターはカルピスの特選バターだが、これは私も毎朝のトーストに使っている。一箱買ってくると小分けにして冷凍し、いつも新鮮な状態を保っている。④バターは合格のはずだ。

フライパンは単身赴任に当たって妻が買ってくれたフランスのティファール社製。テフロン加工がしてあるので焦げ付かないが、使いこんで油のなじんだフライパンとは⑤勝手が違う。それにこれ一つで炒飯でも何でもこなさなければいけないから一人分のオムレツ作りには大きい。コレステロール値を気にしてオムレツの卵は一個で我慢しようとするからなおさらである。［B］だとがん

ばってみても、満足のいく出来には程遠い。だから「オムレツが上手に焼けて」と言われると⑥羨望を禁じ得ない。

ところで、俳句に馴染みのない読者には、この句の「落葉かな」がわかりにくいかもしれない。「オムレツが上手に焼けて」と「落葉かな」は意味の上ではつながっていない。「上手に焼けて」で軽く切って、ちなみに窓の外は落葉の季節ですよ、という感じで季語の落葉を添えているのだ。こうした作り方を俳句では⑦「取り合わせ」または「配合」と呼んでいる。二つのものを取り合わせることによって、広がりと奥行きのある情景を読者に想像してもらうのである。

（中略）この取り合わせの手法は五七五の短い詩型が豊かな内容を得るためにとても重要な働きをするのである。

時彦のオムレツの句の取り合わせからはどんな想像が広がるだろうか。落葉の降る冷たい空気にバターの甘い香りが広がっていくことが連想されないか。冬を迎えた戸外の枯色に対してオムレツの色が一層明るく照り映えるように思われないか。

時彦は実はオムレツは失敗に終わったと書いている。あわやというところで崩れてぐちゃぐちゃになってしまった。えい、面倒くさいと掻き回してスクランブルエッグにしてしまった。——これもまた台所俳句の先輩の愛すべきところだ。

老の春なにか食べたくうろうろす

食いしん坊が年を取ればこういうことになるらしい。「老の春」は俳句独特の言い方だが、［C］のことである。雑煮やお節に飽きて小腹が空くと、何か別のものが食べたくなる。「うろうろす」に老いた食いしん坊のあわれがある。気がつくと台所に足が向いて冷蔵庫や戸棚を覗きこんでいる。私もいつかこんな老いを迎えるのだろうか。

⑧秋刀魚焼く死ぬのがこはい日なりけり

時彦の最後の句集に入っている句である。この頃の時彦は⑨「梶の葉にぴんぴんころり願ひけり」などとユーモラスに詠んで死に対する恬淡とした（＊あっさりとした）態度を示している。梶の葉に願い事を書くのは七夕の習わしである。昨日までぴんぴんしていたのがある日ころりと死ぬ。自分は苦しまず、人には苦労をかけない。そんなふうに死にたい。

しかし、うまそうな秋刀魚を焼いていると急に死ぬのが怖くなる。もしもこれが最後の秋刀魚だったら、と思うと命が惜しくなるのだ。

⑩菜箸で卵をほぐしながら、私もふとこれが最後のオムレツだったらと考える。悔いは残すまい、そう念じながら、フライパンを傾けて柄をとんとんと叩く。

（小川軽舟『俳句と暮らす』による）

問1　――線①「さまざまな事情で厨房に入らなければならなくなった」とあるが、その「事情」を、文章中から五字以内の表現で三つぬき出しなさい。

問2　――線②「否応なしに」を使った例文として正しいものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　応援しているチームが惨敗したので否応なしに気分が落ち込んだ。

ロ　新学期が近づき僕は否応なしに宿題をしなければならなくなった。

ハ　中学校に入学したら否応なしにいろいろなことに挑戦してみよう。

ニ　評判の高い店のフランス料理だったので否応なしにおいしかった。

問3　［A］に当てはまる表現として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　すでに就職している女性が

ロ　結婚していないのに女性が

ハ　台所の仕事が好きな男性が

ニ　女性に成りすまして男性が

問4　――線③「オムレツが上手に焼けて落葉かな」と同じ季節の句を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　うつくしや障子の穴の天の川　　小林一茶（こばやしいっさ）
ロ　くろがねの秋の風鈴（ふうりん）鳴りにけり　　飯田蛇笏（いいだだこつ）
ハ　おろかなる犬吠（ほ）えてをり除夜の鐘　　山口青邨（やまぐちせいそん）
ニ　チューリップ喜びだけを持つてゐ（い）る　　細見綾子（ほそみあやこ）

問5　――線④「バターは合格のはずだ」とはどういうことか。次の文の【　1　】【　2　】に当てはまる表現を、それぞれ十二字以内で考えて答えなさい。

・【　1　】ために必要な、【　2　】ことという条件を満たしているということ。

問6　――線⑤「勝手が違う」の「勝手」と意味が最も近いものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　駅から遠く、買い物に出るにも勝手が悪い。
ロ　経験のある仕事だから、勝手は心得ている。
ハ　祖母の家には、玄関（げんかん）のほかに勝手口もある。
ニ　自分の勝手で休んだことは、反省している。

問7　B　に当てはまる言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　石の上にも三年　　ロ　弘法筆を選ばず　　ハ　割れ鍋にとじ蓋　　ニ　千里の道も一歩から

問8　――線⑥「羨望を禁じ得ない」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　うらやましく思う気持ちを抑えられない。
ロ　うらやましく思う気持ちを認めたくない。
ハ　うらやましく思う気持ちをあきらめきれない。
ニ　うらやましく思う気持ちを我慢するしかない。

問9　――線⑦「取り合わせ」の例に当たる句を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　粕汁にあたたまりゆく命あり　　石川桂郎
ロ　レタス買へば毎朝レタスわが四月　　小川軽舟
ハ　朝ざくら家族の数の卵割り　　片山由美子
ニ　切り口のざくざく増えて韮にほふ　　津川絵理子

問10　［　C　］に当てはまる言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　小春日和（こはるびより）の午後　　ロ　老いて迎える正月　　ハ　気持ちの若い老人　　ニ　春が深まったころの夜更（よふ）け

問11　――線⑧「秋刀魚」と同じ三文字をまとめて訓読みをしている熟語（熟字訓）を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　三日月（みかづき）　　ロ　五月雨（さみだれ）　　ハ　八重桜（やえざくら）　　ニ　十二単（じゅうにひとえ）

問12　――線⑨「梶の葉にぴんぴんころり願ひけり」の句の季節を、漢字一字で答えなさい。

問13　――線⑩「菜箸」と同じ「重箱読み」の言葉を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　大根　　ロ　夕食　　ハ　牛肉　　ニ　小皿　　ホ　台所

問14　この文章全体から読み取れる、草間時彦に対する筆者の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　筆者より俳句の経験が長いわりには、腕前（うでまえ）の方は大したことがないという点を、身近に感じて共感している。

ロ　男性による台所俳句を作ってくれたおかげで、筆者のような男も後に続くことができることに感謝している。

ハ　筆者よりも先に男の台所俳句を手掛（てが）けていた、手本になる俳人として、敬意とともに親しみをいだいている。

ニ　年をとっても悔いは残すまいと俳句を作り続ける姿を見習いたくて、まず料理からまねしようと思っている。